

1990年代の分布調査結果から見る福井県旧上中町のアクセント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大和, シゲミ メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4386

1990年代の分布調査結果から見る 福井県旧上中町のアクセント

大和 シゲミ

1 はじめに

福井県西部の若狭地方には、3タイプのアクセント（以下アと略す）が分布するとされている。甲種、C型、およびB型である。¹各タイプにおける2拍名詞類別語彙の音調は表1のようである。

表1 若狭地方アの3タイプ

	甲種	C型	B型
1類（口・鼻・水…）	●●▼	●●▼	●●▼
2類（石・紙・川…）	●○▽	●○▽	●○▽
3類（山・犬・花…）	●○▽	●○▽	●○▽
4類（帯・肩・松…）	○○▼	●●▼	●●▼
5類（秋・雨・猿…）	○●▽	○●▽	●○▽

大和シゲミ(2001)によれば、この若狭地方の一部である旧上中町では2拍名詞の1類と4類の区別があり、甲種アである。ただし、これは句中での区別であり、句頭においてはともに平板音調の●●▼で現れることが多く、一見C型のようにも見えること、そしてそれ以外にも甲種アとは異なるいくつかの特徴が見られることが同論文で報告されている。

さて、以下で使用する特別な表記と用語は次のとおりである。

表2 表記と用語について

表記・用語	意味
[●]●▼	平板音調の第1拍がより高く実現する
●●▼]	最終拍（助詞）の内部に下降がある
低起式相当語	京都アの低起式と対応する語
高起式無核型相当語	京都アの高起式無核型と対応する語
低起式有核型相当語	京都アの低起式有核型と対応する語

大和(2001)は旧上中町の一人の話者のみを対象とした記述であり、その記述がどの程度まで旧上中町全体にあてはまるのかは不明であった。本稿では、分布調査結果を用い、その不明な点を明らかにする。明らかになったのは、次の(1)～(5)である。

(1)2拍名詞4類における句頭での平板音調●●▼は、旧上中町全体によく見られるが、句中では○○▼の方が多い。(2)2拍名詞1類における語頭卓立音調[●]●▼は、旧上中町全体にある程度見られる。(3)2拍名詞4類における重起伏音調●○▼は、旧上中町全体の中ではわずかである。(4)3拍名詞7類における核が後退した型である●●●▽は、旧上中町全体によく見られる。(5)上記の(1)～(3)は女性に多く現れ、(4)は男女差がない。

以下、第2節では、旧上中町アおよびその周辺地域アの先行研究を概観し、本稿での研究方法について述べる。第3節では、分布調査結果から明らかになったそれぞれの音調の頻度や男女差を示す。第4節でまとめる。

2 先行研究と研究方法

2.1 旧上中町の位置

図1は、1993年時点での若狭地方の市町村区画を表している。旧上中町は、この地域のほぼ中央に位置する町であり、地図中の黒く塗られた部分である。西と北で小浜市と、東で旧三方町と接している。現在は旧三方町と合併し、若狭町となっている。以下では、1993年時点の旧市町村名を「旧」を冠さずに用いる。



図1 1993年時点の若狭地方（黒い部分が旧上中町）²

2. 2 先行研究

若狭地方アに関する先行研究には、表3のようなものがある。調査時期が古い順に並べた。表内の「調査地域」については、1993年時点の地名に置き換えた。調査時期には幅があるが、調査対象者の年齢はほぼ重なる。

表 3 先行研究および本稿の「新資料」

	調査時期	調査地域	調査対象者
平山輝男 (1951a,1951b)	1932-42年頃	高浜・大飯・名田庄・ 三方・美浜・敦賀 ³	1901-23年生あたりの男 女(17名) ⁴
金田一春彦 (1940,1955)	1939-40年頃	小浜	主に1919-24年生あたり の男女(?名)
生田早苗(1951)	1939-41年	高浜・小浜・敦賀	主に1928-30年生の男女 (?名)
奥村三雄(1961,1990)	1949-50年頃	全域(上中を含む)	?(?名)
新資料(本稿)	1993年	上中	1902-1932年生の男女(78 名)
大和 a(2001)	1998-2000年	上中	1913年生の男(1名)
大和 b(2002)	2001-2002年	上中・三方	1913-1935年生の男女(4 名)

表3の中の「新資料」以外で報告されているアのタイプを表4にまとめる。甲種・C型・B型が入り組んだ形となっている。

表 4 先行研究による各地のア

	高浜	大飯 名田庄	小浜	上中	三方	美浜	敦賀
平山	C	甲				甲	C ⁵
金田一			甲～(C) ⁶				
生田	C		C				B
奥村		C～B				甲～C～B ⁷	C～B ⁸
大和 a				甲～(C) ⁹			
大和 b				甲～(C)			

さて、大和(2001)によれば、上中町アは次の(1)～(4)のような特徴をもつ。(1)2拍名詞4類は、句頭で平板音調●●▼がよく現れ、1類と同じ音調となる。ただし、句中では常に○○▼であり1類との区別は保たれる。(2)2拍名詞1類は、語頭が卓立した[●]●▼がよく現れる。卓立しない●●▼も現れ

る。(3)2拍名詞4類は、重起伏音調の●○▼¹⁰が現れるときがある。(4)3拍名詞7類は、京都アと比べて核が後退した●●●▽がよく現れる。2拍名詞5類でも助詞つきでこの現象が見られ、●●▼]]の音調（最終拍内部に下降がある）が現れることがある。¹¹

(1)の句頭での平板音調については、先行研究と一致すると言えそうであるが、(2)～(4)については、若狭地方アにおける先行研究には報告がないようである。¹²

2. 3 研究方法

本稿で用いるのは、1993年の分布調査で得られた資料である。この分布調査は、大阪大学文学部日本学科社会言語学講座の授業「社会言語学演習」の一環として行われた。この調査のうち、上中町地域で生まれ育った老年層78名（男性39名、女性39名）のデータを用いる。

この分布調査の結果のうち、アについては、低起式相当語のうち無核型の音調実現の傾向に関する報告がある（真田信治他1995）が、それ以外の分析が行われないままとなっていた。筆者（大和）による当時の聞き取りの記録が紙媒体で残っており、¹³今回はその記録を用いて100余枚の言語地図を作成した。作成した言語地図はweb上で公開する。¹⁴調査文は付録の表に示すとおりである。これらの調査文について、「この紙に書いてある言葉をふだんの調子ではっきりと読んでください」と依頼した。調査地点は39地点で、上中町のほぼ全集落を網羅する。インフォーマントの年齢は61～91歳（当時）である。¹⁵

第3節で5枚の言語地図を示すが、地点名は付録の図に示す通りである。同じ地点に上下2つ記号が並んでいるが、上が女性、下が男性である。また、同じく第3節で、2. 2節で示した(1)～(4)の特徴について単語別・男女別のグラフ5つを示す。男女差についてはウィルコクソンの符号順位検定を行った。

3 結果

3. 1 上中町全体での頻度

2. 2節で示した(1)～(4)の特徴について順に見ていく。

(1)は、「2拍名詞4類は、句頭で平板音調●●▼がよく現れ、1類と同じ音

調となる。ただし、句中では常に○○▼であり1類との区別は保たれる。」という特徴である。図2は、句頭位置での低起式相当語20語中の何%が平板音調¹⁶で現れるかを示している。句頭での平板音調はこの地域では一般的であると言える。ただし、句中では、図3が示すようにこの割合は減る。¹⁷図3は、句中位置での低起式相当語12語¹⁸中の何%が平板音調で現れるかを示している。

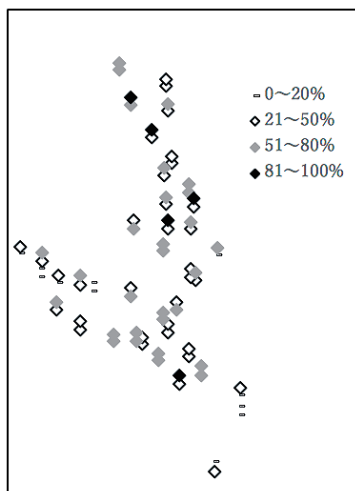


図2 句頭位置の低起式相当語
20語中の平板音調の割合

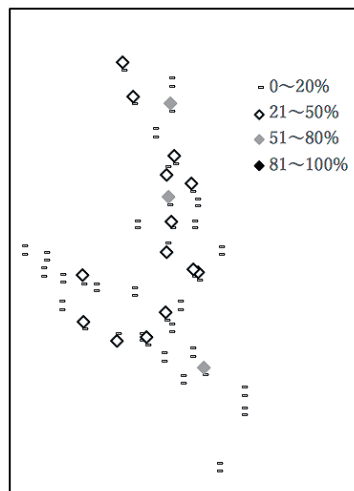


図3 句中位置の低起式相当語
12語中の平板音調の割合

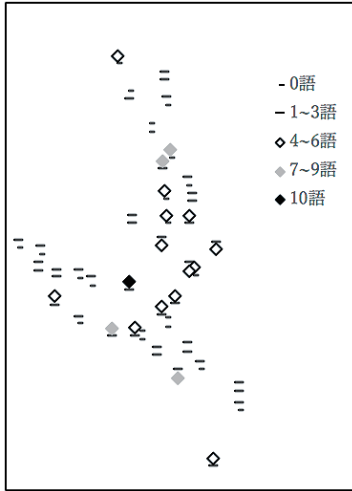


図4 高起式無核型相当語 24 語中の語頭卓立音調の語数

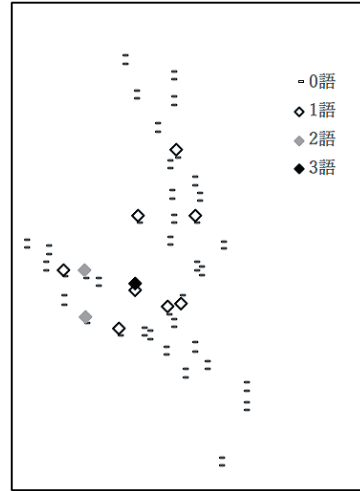


図5 低起式相当語 9 語中の重起伏音調の語数

(2)は、「2拍名詞1類は、語頭が卓立した[●]●▼がよく現れる。卓立しない●●▼も現れる。」という特徴である。図4は、高起式無核型相当語24語中、何語に語頭卓立音調が現れるかを示している。この音調は、上中町全体にある程度見られることがわかる。

(3)は、「2拍名詞4類は、重起伏音調●○▼が現れるときがある。」という特徴である。図5は、低起式相当語のうち、重起伏音調が一人以上に現れた9語の中で、この音調がいくつ現れたかを示す。この音調は上中町全体の中ではわずかであることがわかる。

(4)は、「3拍名詞7類は、京都アと比

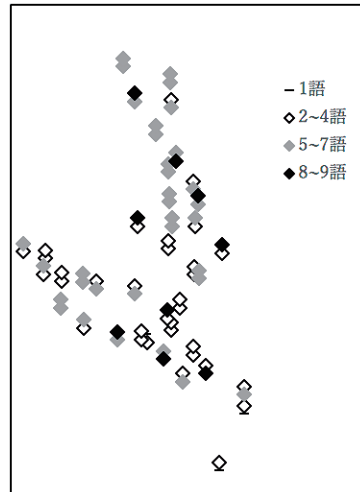


図6 低起式有核型相当語 20 語中の核が後退した型の語数

べて核が後退した●●●▽がよく現れる。2拍名詞5類でも助詞つきでこの現象が見られ、●●●▽]]の音調が現れることがある。」という特徴である。図6は、低起式有核型相当語でかつ核の後退が確認可能な20語中、いくつかの語にこの音調が現れるかを示している。¹⁹この現象は多くの話者に現れると言える。

3.2 男女差

2. 2節で示した(1)~(4)について男女差を見ていく。以下のグラフでは、横軸上の語句の前の数字は調査文の番号である(付録の表参照)。

図7と8は、低起式相当語に現れる平板音調の単語別・男女別のグラフである。図7が句頭、図8が句中におけるものである。句頭・句中ともに男女間で有意差があり($p < 0.01$)、女性に多い。²⁰ 図9は、高起式無核型相当語に現れる語頭卓立音調の単語別・男女別のグラフである。男女間で有意差があり($p < 0.01$)、女性に多い。図10は、重起伏音調の単語別・男女別のグラフである。男女間で有意差があり($p < 0.05$)、女性に多い。図11は、低起式有核型相当語に見られる核が後退した型の単語別・男女別のグラフである。男女間での有意差はない。²¹

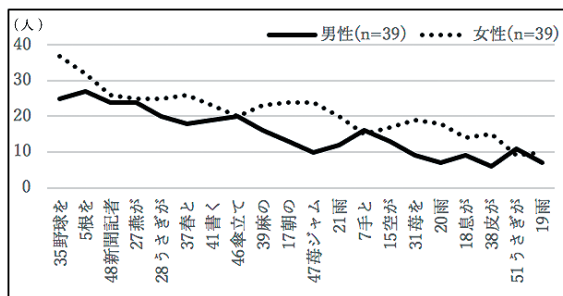


図7 句頭での低起式相当語における平板音調

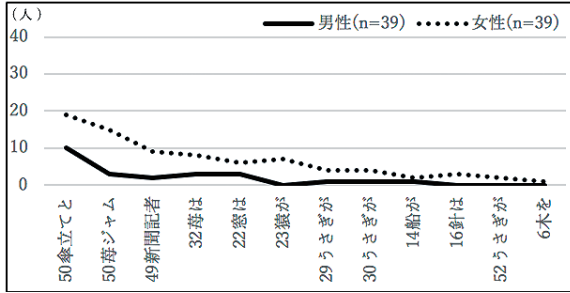


図 8 句中での低起式相当語における平板音调

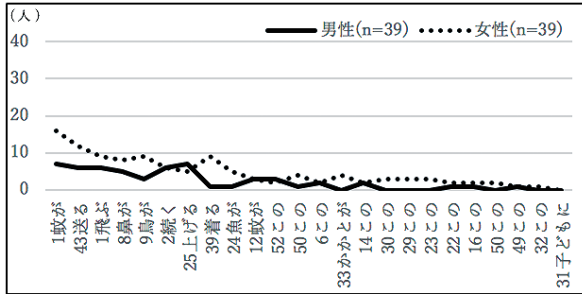


図 9 高起式無核型相当語における語頭卓立音调

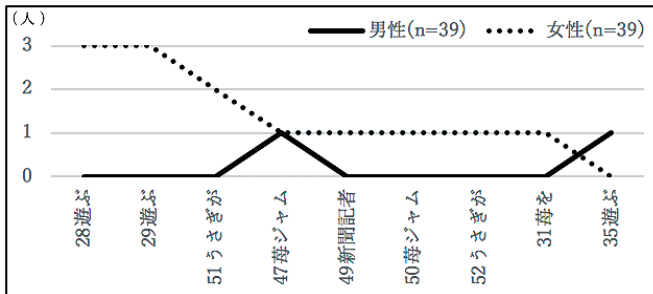


図 10 低起式相当語（一部）における重起伏音调

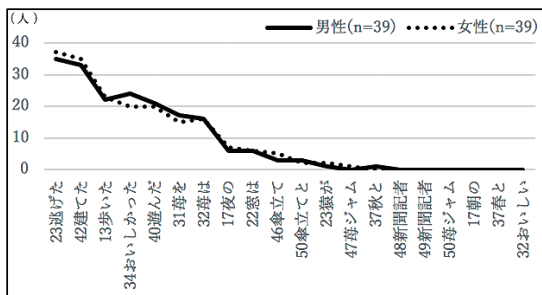


図 11 低起式有核型相当語における核が後退した型

4 まとめ

本稿では、大和(2001)と分布調査結果を比較した。前者において指摘された4つの特徴について、上中町全体での頻度と男女差が明らかになった。(1)2拍名詞4類などが句頭で●●▼、句中で○○▼で現れる現象はよく見られ、(2)2拍名詞1類などの語頭が卓立して[●]●▼で現れる現象はある程度見られた。そして、(3)2拍名詞4類などの重起伏音調はわずかしか見られず、(4)3拍名詞7類などの核が後退した型はよく見られた。(5)4つの特徴のうち、(1)～(3)は女性に多く見られ、(4)は男女差がなかった。

謝辞

1993年の分布調査にご協力くださいました皆様に心よりお礼申し上げます。

注

- ¹ 用語は生田(1951)に合わせる。
- ² 国土地理院「全国都道府県別・市町村合併新旧一覧図」を改変し作成。
- ³ ただし、現在の敦賀市の一部であった旧東浦村については、平山(1951a)で甲種ともC型ともB型とも異なる音調をもつと報告されている。
- ⁴ 平山(1951b)には調査当時の年齢が記されている。調査期間の中間である1937年当時にその年齢であったと仮定して、大体の生年を算出した。

- ⁵ 旧東浦村の地域は除く。
- ⁶ 金田一(1940, 1955)で、2拍名詞1～5類のほとんどすべてが京都・大阪のものとは一致するが、3拍語の「兎」や「歩く」において●●▼が現れ、「京都・大阪との間に可成著しい相違が現れる」とされている。
- ⁷ 奥村(1961)では「準垂井式(京都式から綾部式への過渡期)」とされている。また、この準垂井式は「B式・C式を含む」とされ、若狭中央部では甲種とC式の間段階の方言があるとされている(奥村1990のp. 268, 266)。
- ⁸ 奥村(1990)では、自身による1950年の敦賀市調査で、第5類に●○▽～●●▽の揺れが見られたとある(p. 272)。
- ⁹ 句頭位置では2拍名詞1類と4類がともに●●▼となつて一見C型のように見えるが、句中位置では区別が保持されている。
- ¹⁰ 起伏の幅が狭いこともある。
- ¹¹ 長い語でもこの現象はさかんに現れる。「野菜畑」なども末核型である。
- ¹² (2)の語頭卓立音調については、平山(1951a)が、名田庄・大飯・三方・美浜(のいずれかの地域であろう)において、1類動詞が頭高型になる個人があったことを報告している。また、地理的にかなり離れているが、生田(1951)では、三重県の本木には、2拍名詞1類で第1拍が高くなる個人があることが報告されている。(4)の2拍名詞5類の核の後退については、金田一(1940)が滋賀県の海津で低起式語の末核型が多いことを記している。また、生田(1951)では、三重県の本木において、2拍名詞5類助詞つきにおいて核の後退が見られる個人があるとしている。
- ¹³ 調査では、受講学生の数十名が分担して調査地点へ出向き、録音を行った。その録音を筆者が聞いて音調を記録した。聞き取りが行われた時期は1994年と記憶している。
- ¹⁴ <http://phonetics.sweet.coocan.jp/>にて順次公開する予定である。
- ¹⁵ 若年層の調査は、アについては行われなかった。
- ¹⁶ 有核語の場合は、語頭から核の位置までが平板であるものを平板音調とする。
- ¹⁷ 句中においても平板化を起こしている話者があることは注目すべきであると思われる。ただし、大和(2002)によれば、上中町大鳥羽の女性がこのような音調を持っており、例えば、「この口」も「この帯」もともに●●●●

のような発音になるが、詳しく尋ねると、「この帯(●●○●)」は言うが、「この口(●●○●)」は言わないという内省が得られ、かろうじて1類と4類の区別を保っているようであった。

¹⁸ 「この」が前接する12語である。

¹⁹ 「逃げた」「建てた」についてはほぼ全員無核型であるが、核の後退が進んだ結果であると解釈し、この地図の中に含めた。「夜の(海)」「猿が(逃げた)」なども無核型として聞き取っているものがある。

²⁰ 語彙項目による差は、句中の場合にありそうである。長い有核語>短い有核語>無核語の順で多く現れているように見える。

²¹ 3拍1段活用の2類動詞過去形ではほとんどの人が核を後退させ無核化している。3拍5段活用の3類動詞過去形や「おいしかった」がそれに続く。京都アで次末核型の比較的長い名詞は核の後退を起こしにくいように見える。

参考文献

- 平山輝男1951a. 「福井県下の音調(上)」『音声学会会報』77, 21-25.
- 平山輝男1951b. 「北陸道方言の音調」寺川喜四男, 金田一春彦, 稲垣正幸共編『国語アクセント論叢』, 191-254. 東京: 法政大学出版局.
- 生田早苗1951. 「近畿アクセント圏境界地区の諸アクセントについて」寺川喜四男, 金田一春彦, 稲垣正幸共編『国語アクセント論叢』, 255-346. 東京: 法政大学出版局.
- 金田一春彦1940. 「国語アクセントの地方的分布」国語教育学会編『標準語と国語教育』東京: 岩波書店. (金田一春彦2005. 『金田一春彦著作集』6, 635-667. 東京: 玉川大学出版部に再録)
- 金田一春彦1955. 「近畿中央部のアクセント覚え書き」『近畿方言双書』1, 323-345. (金田一春彦1977. 『日本語方言の研究』, 412-430. 東京: 東京堂出版に再録)
- 国土地理院. 「全国都道府県別・市町村合併新旧一覧図」http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/gappei_index.htm (閲覧日2018/10/15)
- 奥村三雄1961. 「京都・滋賀・福井」東条操監修『方言学講座』3, 111-150. 東京: 東京堂.
- 奥村三雄1990. 『方言国語史研究』東京: 東京堂出版.
- 真田信治・井上文子・大和シゲミ・日高水穂1995. 「滋賀県今津町・福井県

大 和 シ ゲ ミ

上中町における方言の動態」『日本学報』14, 107-141.

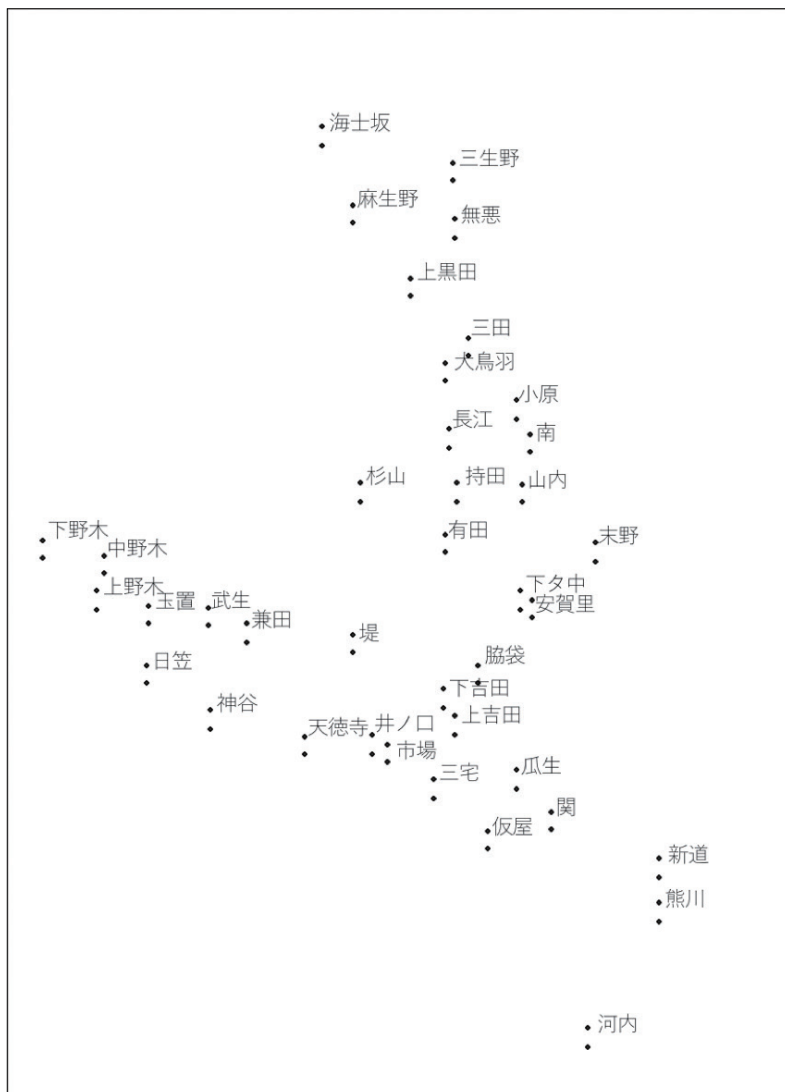
大和シゲミ2001. 「福井県上中町におけるアクセント体系の概観」上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』, 129-152. 科研報告書.

大和シゲミ2002. 「上中方言アクセント資料」上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』3, 173-218. 科研報告書.

付録

付表 調査文一覧

番号	調査文	番号	調査文
1	蚊が飛ぶ	27	燕が飛び交う 田んぼの真ん中
2	暑い日が続く	28	うさぎが田んぼで遊ぶ
3	涼しい日が続いた	29	このうさぎが田んぼで遊ぶ
4	一年中で一番昼が短い日	30	このうさぎが動いた
5	根を切る	31	苺を子どもに上げた
6	この木を切った	32	この苺はおいしい
7	手と足	33	かかとが高い靴
8	鼻が赤い	34	キュウリがおいしかった
9	鳥が飛んだ	35	野球をして遊ぶ
10	山と川	36	赤いマッチと、白いマッチ
11	花がない	37	春と、夏と、秋と、冬
12	蚊が出る	38	皮が厚い
13	犬も歩く、牛も歩いた	39	麻の服を着る
14	この船が動く	40	フランスで遊んだ
15	空が青い	41	書く、書いた
16	この針は軽い	42	建てる、建てた
17	朝の海と夜の海	43	送る、送った
18	息が白い	44	頼む、頼んだ
19	雨	45	喜ぶ、喜んだ
20	雨やんだ	46	傘立て
21	雨降った	47	苺ジャム
22	この窓は大きい	48	新聞記者
23	この猿が逃げた	49	この新聞記者
24	魚が逃げる	50	この傘立てとこの苺ジャム
25	頭を上げる	51	うさぎが
26	命は尊い	52	このうさぎが



付図 調査地点